

2024年 4月 30日

日本災害復興学会 2022年度研究会
活動実績報告書

<研究会名称>

上手な思い出し方研究会

代表者	高原耕平
企画分担者	定池祐希
	古関良行
	ゲルスタ・ユリア
	土方正志
	奥堀亜紀子

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施した研究活動の全体概要

本助成により実施した研究活動のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

<p>【課題、目的】 この研究活動を行った動機や目的を記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 災害の記憶をめぐる実践・研究が拡大・一般化し、それに伴って記憶の「手段化」が生じている。 ● 災害の記憶を「手段」に限定しない、「上手な思い出し方」の可能性を研究する。
<p>【社会的背景】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 阪神・淡路大震災以降、災害の記憶をめぐる実践・研究が拡大し、東日本大震災を経て一般化した。例：語り部活動、防災教育、記録や文集の編纂、デジタルアーカイブの開設、マスメディアの周年報道、災害ミュージアムの建設など。それらの活動の重要性は社会的に認知され、手法が洗練されている。 <ul style="list-style-type: none"> ➢ この動向は広くは90年代以降の世界的な「記憶ブーム」の流れを汲むものであり、また実践手法のいくつかは戦災の記憶をめぐる実践を土台としている。 <p>【課題、目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 災害の記憶をめぐる実践・研究の拡大は、生活やアイデンティティ、社会の紐帯を再生しようとする人々の切実な思いを原動力としている。災害の記憶の実践・研究は、復興過程の一部である。 ● しかし、そうした実践・研究が拡大し自明のものとなるにつれて、記憶は防災や伝承といった（それ自体は必須である）目的を達成するための手段とみなされるようになっていく。 ● 災害の記憶は確かに防災や伝承の重要な支柱であるが、それらのための手段にすぎないものではない。想起、忘却、再編、記銘、表現、沈黙、共感、隔絶…といった多様な様態を持ち、思うに任せぬものである。また、集合的記憶・外傷的記憶でもある。災害の記憶のこうした複雑で繊細な在り方は、復興過程の原動力である。災害の記憶の手段化が過度に進むことで、こうした複雑で繊細な在り方を単純化し、記憶と復興のつながりを逆に弱めてしまう。 ● そこで、被災地における記憶実践や研究動向を収集共有し、記憶の手段化に限定されない記憶実践・研究の方途を探る。本研究課題では、これを「上手な思い出し方」と表現する。



<p>【実施方法、内容】 この研究活動の実施方法、内容を記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 定期的な研究会の開催、災害の記憶をめぐる実践・研究動向の収集共有 ● 一般参加型のワークショップを通じた「災害の記憶の上手な思い出し方」の社会実践
<ul style="list-style-type: none"> ● 2ヶ月に1回のペースで研究会を開催し、メンバー各自のフィールドや関心に基づいて災害の記憶をめぐる実践や研究動向を紹介しあい、議論を行う。各自の紹介事例等は以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 高原… 阪神・淡路大震災被災地域の防災教育、福島県浜通り地域の状況 ➢ 定池… 奥尻島、胆振東部地震、仙台市近辺の状況 ➢ ゲルスタ… デジタルアーカイブ、福島県浜通り地域の状況 ➢ 奥堀… 石巻市の状況 ➢ 古関… 東北地域全体、河北新報紙の取り組み ➢ 土方… 大川小学校周辺地域、出版関係状況など ● 一般参加型の小規模なワークショップを企画実施し、研究会での議論を通じて得た「上手な思い出し方」の理念が被災地内外で通用するか、検証する。



【活動成果】 この研究活動で得られた成果を記入してください。
<ul style="list-style-type: none">● 「災害の名前／呼び方」「土地の記憶と個人の物語の交差」についての復興学会分科会発表、雑誌『被災学』への寄稿● 石巻市における記憶実践ワークショップの企画・準備
<ul style="list-style-type: none">● 前項の研究会活動を通じて、災害の記憶の「上手な思い出し方」の諸事例を検討し、さまざまな角度からその本質を考察した。そのなかでも特に①災害の「名前／呼び方」、②土地の記憶と個人の物語という2つのテーマについて議論を深めた。<ul style="list-style-type: none">➢ ①「災害の名前／呼び方」… 自然現象としては単一のハザードであっても、それによる災害の名付け方や呼び方、指示詞の用い方は、語り手の立場や当事者性や発話の文脈によってさまざまな使い分けが為される。たとえば関西出身の高原は「兵庫県南部地震」を「あの震災」「神戸の地震」等と呼ぶが、「東北地方太平洋沖地震」については「あの震災」とは決して表現しない。一方、東北地域で被災した古関や土方は、特に被災体験が近いもの同士の打ち解けた場所では東日本大震災を「あのとき」などと呼ぶ。また、発災から時間が経過して状況がやや落ち着いたとき、「この災害」から「あの災害」へと呼び方が変わったという事例も紹介された。このような名前／呼び方の微細な使い分けは、災害の記憶の上手な思い出し方の一部である。➢ ②「土地の記憶と個人の物語の交差」…その土地で起きてきた災害の記憶は、地形や人工物に蓄積し、あるいは風化してゆく。他方でその土地に生きる人々は、土地の地形や人工物に日々接しつつ、自身の災害の物語を編んでゆく。この両者を切り離さず、土地の記憶と個人の物語が交差する場面に焦点を当てることは「上手な思い出し方」の一例となる。● これらのテーマについて、災害復興学会 2022 年度大会分科会で発表を行い、また雑誌『被災学』17号に研究会活動をベースにした論考を寄稿した。● 次いで、石巻市の郷土史団体「石巻アーカイブス」と共催で、「土地の記憶と個人の物語の交差」をテーマとした一般参加型ワークショップを企画し、準備を進めた。● 2024年2月の開催を目指し、高原と奥堀が中心となって2023年秋より議論を深めてきたが、2024年1月1日の能登半島地震の発生により延期することとした。共催者より能登半島地震の推移を見守りたい・現地状況がわからないまま石巻のみでイベントを開催することを避けたいという申し出があり、石巻市に居住していた奥堀も同様の意見であった。

2. 本助成により実施された研究活動に関して補足説明することがあれば記入してください。
(例：実施した研究活動の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等)

<ul style="list-style-type: none">● 上記の一般参加企画の内実の準備の過半は完了している。改めて日程調整を行い2024年中に実施することで研究会メンバーおよび共催者と合意しており、現地と歩調をあわせて開催にこぎつきたい。
